

各務良幸氏にきく 1920 年代のアルプス

— 第 6 回山岳史懇談会から —



当日の各務良幸氏と署名 / スケッチ・宮下啓三



昭和 53 年 (1978 年)

7 月号 (No. 397)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目 次

- 各務良幸氏に聞く 1920 年代のアルプス
— 第 6 回山岳史懇談会から — (1)
- ブル・モンヌーンの成果
— ヒマラヤン・クロニクル —
(片山全平) (4)
- 立山の開発と自然保護
(若林啓之助) (4)
- 忘れ得ぬ人との出会い
— 木暮祭に初参加して —
(関塚貞亨) (5)
- 図書紹介 (7)
- 地方居住会員へのお願い (7)
- ルーム基金応募者ご芳名 (12) (7)
- 東西南北 (8)
- お知らせ (9)
- 会務報告・ルーム日誌・会員動向 (10)

▶ 日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10 時～20 時
水、金曜 13 時～20 時
日曜・祭日は休み

▶ 図書室開設時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13 時～20 時

図書委員会では、第六回山岳史懇談会を三月十六日、移転して間もない新ルームにおいて行った。今回は、宮城蔵王から各務良幸氏をお招きし、「一九二〇年代のアルプス」というテーマを中心に語っていただいた。各務氏は東京

のご出身で一九〇四年のお生まれ、今年七十四歳。本会には所属されておられなかったが、ケンブリッジ大学留学中から、ヨーロッパ・アルプスの登攀やスキーに若い情熱をそそがれた方であり、当時海外の山で活躍した日本人のなかで

は、パイオニアの一人に数えられる方である。各務氏の談話の内容は、モン・モディ初登攀、マッターホルン登攀、スマイスとの交流のことなどのほか、話題はノルウェー、朝鮮、さらにロッキーの山や、そこで会った人達にも及んだ。また当日は、会場に、『山岳大観』(昭和六年・木犀社書院)の共著者である麻生武治氏も姿を見せておられ、懇談の途中、各務氏から特に指名をうけた麻生氏が、アルプスでの思い出の数コマを愉快に語りつないで、爆笑と拍手喝采を浴びるという場面もあった。

懇談会は、ある喫茶店でまたまたま隣り合せのことから各務氏を知り会うことになったという宮下啓三委員の司会で、各務氏、山崎安治委員長の挨拶、各務氏の談話、つづいて来会者からの質問という順序で行われた。以下は、その内容の一部を要約したものである。

各務氏については、昭和五年の「アルパイン・ジャーナル」に、カガミ・ルート——モン・モディの初登攀の記録が載っている。われわれが目にする正式の記録はそれだけであるが、昭和六年(一九三一年)、シュミット兄弟がマッターホルン北壁に登る以前にすでにゴッドフリート・ペレンという有名なガイドと二人で、マッターホルンの北壁をほとんど三分の二ぐらい登っておられる。またマッターホルンについては北壁だけでなく、あらゆる四つの稜から、実に十六回も登られていると聞いて驚いている。今までは松方さんが、四回から五回登っている記録が当時の日本人では多い方であった。各務氏は当時日本山岳会におはいらなくなっていなかったため、そのような話が今までわれわれに伝わらなかった。

また、山と溪谷社の「岩と雪」

△山崎安治委員長挨拶▽

各務氏については、昭和五年の「アルパイン・ジャーナル」に、カガミ・ルート——モン・モディの初登攀の記録が載っている。われわれが目にする正式の記録はそれだけであるが、昭和六年(一九三一年)、シュミット兄弟がマッターホルン北壁に登る以前にすでにゴッドフリート・ペレンという有名なガイドと二人で、マッターホルンの北壁をほとんど三分の二ぐらい登っておられる。またマッターホルンについては北壁だけでなく、あらゆる四つの稜から、実に十六回も登られていると聞いて驚いている。今までは松方さんが、四回から五回登っている記録が当時の日本人では多い方であった。各務氏は当時日本山岳会におはいらなくなっていなかったため、そのような話が今までわれわれに伝わらなかった。

十六号に、モン・モディの登山の記録をお書きになっているが、それに出てくる地図などのルートも「アルパイン・ジャーナル」の正確な記録とは異なっている。今日はそのようなこともあわせてお話を伺いたい。

〔各務良幸氏の話〕

今日はお招きをいただきましてありがとうございます。私、凍傷にかかっておりますが、これは先月、友人の方々と宮城蔵王のゲレンデの上から二時間半ばかり、刈田峠のうえにあがった時にかかったものです。

やはり油断大敵、山というのは恐いものだとすることがわかったと思います。軽装備にすぎたのがいけなかったのです。どんなところでもバカにしてはいけいないのだという、山から受ける私達の哲学というもの、随分値うちがあるものだと思います。

事務室休室のお知らせ

8月12日(土)～8月18日(金)
職員休養のため右期間は本会本部事務室を休室いたします。来室はもちろん電話も通じませんのでご諒承下さい。

理事会

連れられて、スコットランドのペンネビスで山登りを始めたのが最初です。

私のアルプス行は、一九二〇年（大正九年）にシャモニへ行ったのははじまるのです。そしてそのホテルで、アメリカのワシントンという人に会った。ナショナル・ジオグラフィック・ソサエティなどのものにたくさん書いてあるが、先生も初めてであり、私も初めてであった。しかし、一緒にエギトユ・デュ・ミディあたりへ行ったら撮った写真がわりあいよく撮れていたで、先生もそれきりきりやみつくことになったのです。

学校時代は休みが長いし、ロンドン近辺にいると誘惑が多いものですから、私はよくスイスへ行っ過ぎて過すようになった。

モン・モディの登攀

今日はモン・モディの話をするようにとのことですが、一番最初の出会いがジェフリー・ヤングさんなのです。それからジェネラル・ブルース、アーノルド・ランなど、ミュージレンで会ったのがフランク・スマイスとのめぐり会いのはじめです。

このモン・モディを計画したのは私ではなく、これはスマイスが計画したルートであった。八月の末にペルイという人のほか四人で会い、また以前から知っていたブ

ラウンさんとでやることになった。一九二九年、昭和四年のヨーロッパの八月の気候は異常といわれるくらいに悪かった。

しかし、この計画は結局、途中で膝をケガした人がでたため中止して、クルメイユールにおいてロンドンに帰ってしまった。私はそのまま大陸に残っていたところ、その後を君やらないかという手紙がきたので、ふたたびやる気になりミュージレンからシャモニへ行った。そこでゴッドフリート・ペレンというツェルマットの名ガイドを呼び、グレボンとドリユ、それからメール・ド・グラスからグラランド・ジョラスのほうを稽古し、また近辺をエギトユ・デュ・ミディやトリノの小屋で研究し、そして九月になってからこれにかかった。

はじめの日にエギトユ・デュ・ミディから出てトリノの小屋に寄り、ジェアンの氷河を渡った。あのジェアンの氷河はメール・ド・グラスでフランス側へおりにいるが、ブレンヴァの氷河に出なければならぬのでそれを計画した。モン・モディのブレンヴァの氷河の頭が三五〇メートルで、頂上が四三〇メートル位ですから八〇メートル位の面なのです。それで一晩前にステップをきってブレンヴァの氷河まで出た。夜のうちにランタンをつけてステップカッティングをしながら登りも下り

も両方やったが、ランタンをつけての下りのステップカッティングはやさしいものではなかった。

そしてペルクシユルントが思ったよりも大きかったため、岩場にとりつけず時間をくったが、たしかなブリッジを見つけて岩場にとりついた。そしてその岩場は案外簡単に登ることができた。

さつき、山崎さんとも話したことです。イタリア人が先に登ったのではないかとわかれていたが、トリノの小屋の番人の話によると、イタリア人たちは確かに先に行ったが、そのままクルメイユールに下りて、その病院で凍傷の手当をしている。もしも、モン・モディの山頂に達したならば、ジェアンの氷河のほうをまわって帰ってこなければならぬのに帰ってきいていない。帰りに小屋に寄らなかつたということも話していた。また小屋にはなにも記録が残っていない。

アルパイン・ジャーナルには、点線で書いてあってイタリア人たちが登ったというところは書いてあるが、私の知っている範囲では、彼らは凍傷にかかり途中で下りたというのが事実のようです。

登攀は、チムニーもあって大変苦勞したので、ピトンを使おうかという話でしたが、今なら皆さん使うところでしょうが、我々アマチュアはそのようなものはなるべく使わないようにしようという私

山をきれいに「三」は持ち帰ろう

の考えから、ゴッドフリートに肩をかしたり、トラバースなどをくり返しながら登った。途中、オーバーハンクしていて、ルートファインディングが無理なところがあつたが、そのようなときはいったんおいて、西の方へ行くとおかしくなるのが解っていたので、東へ東へと回って行って、モン・モディの山頂の東側へ見当をつけていったわけです。苦勞して雪庇の下に出たが、モン・ブランの四千何百メートルの雪庇はちょっと考えられないようなもので、ピッケルを二人が交代に先を尖らしておかないと、青水で大変骨がおれるような状態であつた。

最後にトンネルのようなものをあけて頂上に出た。小屋を出たのが朝の三時で、午後の三時頃山頂に達した。モン・ブランがきれいな姿を見せていた。

下りはジェアンの氷河を下ってトリノの小屋においた。そのようなときもやっぱり油断大敵というのがあると思うのですが、つい小屋のそばまできて、ペレンと並んで歩いてきたとき、小屋の人が手を振ってくれているその前二人ともクレパスに落ちてしまった（笑）。

次はスマイスのことですが、この図書室を拝見しても、あれだけの本をよく書いたという人がいるのです。スマイスにめぐり会えたということが私にとって幸福であつたかも知れない。

二人でガイドレスの旅をよくやつた。昭和四年の正月、ミュージレンでカンダハのスキーの連中と集っていたとき、アイガーはどうかという話が出た。二人で急いで道具を揃えてクライネシャイデックへ行つたが、正月であるのにスキー場のセンターのシャイデックが閉つていて泊ることができなかつた。ユングフラウヨッホのフニキュラ（登山鉄道）をやっている人のはからいで、電車の車掌の部屋に泊めてもらうことになった。

そのときは、メンヒの氷河から登つた。そして大変苦勞して山頂があつた。そして五〇〇から六〇〇フィートのリッジまでとりついていた。しかし、岩場には青氷がついているうえ、足場も手掛りもなく、当時の六本爪の道具では困難であることがわかつた。山というものは、無

プレ・モンスーンの成果

——ヒマラヤン・クロニクル——

片山 全平

78年の四、五月は、日大隊と植村直己の北極点行に湧いたが、一方ネパール・ヒマラヤのプレ・モンスーン期も大きな成果を見た。ネパール登山は当初豪雪に懸念されたものの、エベレストの無酸素登頂(塊、西独隊)、カンチエン

詳細は知らされていないが、ハーベラーにとっては最初の八千メートルだった。ヒドン・ピークにおける高度障害を近着の「The Challenger」(メスナー著、英訳)から触れておく。

登頂(塊、西独隊)、カンチエンジュンガ南峰初登攀(ポーランド隊)、ダウラギリ主峰、第二峰(各日本隊)のバリエーション・ルートの初登攀があげられ、登山史のなかでも画期的なものと位置付けられる。

エベレスト隊(W・ナイツル隊

BC(五一〇〇メートルルニアブリッジ氷河上)を八月八日発、ガリヤブルム氷河上に一回目のビバーク(五九〇〇メートル)。九日、「アイガー北壁より困難な」(メスナー)北西壁を登高、二回目のビバーク(七一〇〇メートル)。

長)は東南稜から八人の登頂者を出し(通算十六隊)、このなかでR・メスナー、P・ハーベラーの無酸素登頂(五月八日16時サウス・コル登——12時登頂——14時帰着)と、F・オップルックが単独登高に成功している。

このビバーク地点で、帰路について(懸垂下降のため)ザイルを持ってくるべきだった(ハーベラー)。「いや、なんとかなるさ」(メスナー)。また翌日の登頂には「リュックをここに置こうよ」(ハーベラー)と、撮影機は出来るだけ持ち上げるよ(メスナー)と

エベレストの無酸素組は、一九七五年ヒドン・ピーク(八〇六八メートル)の北西壁初登攀に成功した二人組。メスナーはナンガ・パルバート、マナスル、ヒドン・ピークにつぐ四つ目の八千メートル峰となり、これは世界最初の男だ。前日睡眠用酸素も使用せず、無酸素登高がどんな過酷なものか

議論を重ねるが、行動能力の点でメスナーが上回っていた。こんな会話を交して、ハーベラーが氷河を見下ろしたとき、突然苦痛と恐怖につつまれ、一言も喋らず、寒さの中にうずくまった。爆発しそ

し、頭痛止めの薬を飲ませた。ところがしばらくして、ハーベラーは憑き物がおちたように元気を回復し、明日の登頂準備に取りかかり出した。こんな状態で、七千メートルの経験もない彼に致命的な障害とはなっていないのである。十日登頂後、七一〇〇メートルビバーク地点へ、十一日五九〇〇メートルビバーク地点へ、十二日BC着となるが、鍛え上げた鉄の肺「コンビは一九七四年、メスナーがアコンカグア南壁の新ルート単独登攀をしたあと、二人のコンビが組まれ、八時間のマッターホルン北壁、ついで十時間のアイガー北壁という速攻を仕上げており、このコンビは、誰にも負けない動物的本能(Tasman)と、メスナーは自負している。

●自然保護情報

立山の開発と自然保護

若林 啓之助

立山は平安時代の昔から宗教登山の修練場として拓かれた山でありましたが、明治二十六年にウェストン師が『日本アルプス』を発表した頃から漸次近代登山に移行して参りました。大正年間に富山から電車を延長し、目的に富山から電車を延長し、昭和十二年には千垣まで開通しました。これによって立山への足は便利になり、年間約二十万人の登山者を数えるようになりました。電車はさらに有峰の開発があつて粟栗野まで延長されました。戦後になって富山地方鉄道は千寿ヶ原へ延長し、千寿ヶ原から美女平まではケーブルカーを架設したのが昭和二十九年八月のことでした。この頃から全国的に流行の光が見えはじめた観光開発に富山県も着目するようになり、美女平から上部へ自動車道路を建設しようという動きが出てきました。

この段階で当時立山を知る県内唯一の団体でありました富山支部は「山の上まで車を上げる」ということは山の静寂を破り、自然を破壊するものではないか」という声を起し、当副会长であった榎有恒さんを中心として、本部の方達、あるいは国立公園審議会委員の方々にも現地視察を依頼し、診断を願つたのであります。その結果スイス等外国の例なども勘案されて、自動車道は弥陀ヶ原までは認められませんが、それ以上は絶対いけないという結論になりました。これが立山での自然保護運動の最初の一歩であるかと思ひます。また果当局に働きかけて知事の諮問機関として立山開発審議会——後に観光事業審議会——現在自然環境保全審議会公園部会——の設立となり、この機関の答申がなければ立山の開発は一切まかりならぬという意気込みでありました。美女平——追分間一四キロの道路はこのようにして昭和三十一年八月に富山県によって開通しました。

この道路の着工と前後して関西電力が黒四ダムを御前沢合に建設する計画を検討しはじめ、昭和三十一年六月に国立公園審議会を通過して、厚生大臣の認可が降りていたので、従

壁に取り付いた。八三七七メートル地点まで迫ったが、残留酸素の不足もあり登頂を断念している。その翌年のナンガ・バルバートへはキンスホッフ・アルトを経由するが、登頂は成らなかった。今春マッターホルン北壁を登った嶋満則夫妻は、この壁の冬季女性第一号登攀をポーランド女性隊と争うかたちとなったが、同国は女性登山家を含め、国家的事業としてすざましいものがあると、夫妻は語っている。

このK2に英ポニントン隊が今夏未踏の西稜から八隊員で挑む。主力はN・エスコート、P・ブレイスウエイト、P・ボードマンらエベレスト南西壁隊だ。この計画はD・ハストンが南西壁に成功したあと練っていたものだが、そのハストンは欧州アルプスのホームグラウンドで雪崩遭難してしまっ

日本隊の成果

日本隊の成果はダウラギリ主峰柱状南岩稜の初登攀である。一九七一年マナスル西壁を初登攀した雨宮節隊長らの仲間が鈍先きをここに向け、第一次(一九七五年)そして今回と、七年間、六千万円、そして六人の犠牲によって遂に完成、重野太肚二、小林利明が、第二次は清水清二、加藤康二、吉野寛とシエルバのカンカミが登頂した。山学同志会のジャヌー北壁に

つぐ快挙である。

メスナーはヒマラヤ登山の発展を三段階に区分し、①「Alpinism of Conquest」(エベレスト初登頂など)②「Alpinism of Difficulty」(アンナプルナ主峰南壁など)③「Alpinism of Style」。いまその「Style」の時代であり、これを「Sport」ともいう。この時代への夜明けとして、二人だけのヒドン・ピークをメスナー自身が開

忘れ得ぬ人との出会い

——木暮祭に初参加して——

関塚 貞亨

拓、今年にはエベレストの無酸素登山というスタイルに形を変え、またダウラギリ主峰では、メスナー自身お手上げの柱状南岩稜を雨宮隊がから取った。そしてフランスは今夏、ヤニック・セニエール、ジョルジュ・ベックタンブルの二人がブロード・ピーク(八〇四七メートル)西稜からの無酸素登攀を試みる。スパー・アルピニズムの追求である。

初めて木暮祭に参加して多くの印象深い出来事があった。これらのことを煎じつめると「木暮翁の衣鉢を継ぐ人々との出会い」に帰することができるよう思う。山へ登り始めて三十五年ばかり経つたいま、過去をふりかえってみると、山頂や谷の水呑場で、山小屋のいろりばたで多くの人と語りあってきた。ほとんど名乗り合わな

いまま右と左に別れてきたから、どこの誰とも知らず、いまま背景の山谷と結びついて、懐しく思い出す人々がいる。木暮祭でお会いした方は、どこの誰かを知ってお

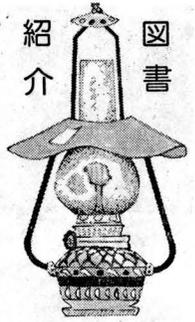
ることが一層有難い人たちであった。

木暮翁のイメージは、私のなかに本を通じて、いつのまにか形造られたものであるが、主として田部重治著「山と溪谷」による影響が大きい。私にとって木暮翁は、いつの間にか「理想的なリーダー」としてのイメージが固定し、山のパートナーとして、このよう

な人にめぐまれた人は幸福であると考えようになっていた。木暮祭でお会いした人々は、何らかの形で木暮翁の衣鉢を継ぐものを持っているように感じられたのである。

追分までの自動車道の完成に続いて、初期の黒四ダムへの輸送ルートとして室堂一ノ越を経由する工用仮設道路が建設されることになり、これはその年の積雪時までに室堂までジープやブルドーザーが入るようになりまし。しかしダム建設に必要な膨大な量の資材をこのルートで運ぶことは不可能ですから、関西電力は長野県大町市から赤沢岳の直下を抜く大町ルートの建設にも同時に着工し、幾多の困難の後、昭和三十三年五月にダムサイトに到達しました。ところが認可の条件に「工事竣工後これを公衆利用に供する」ことになっていました。このことは富山県の地域に属する黒部が、長野県の延長として、その利用権を奪われる結果となるので、富山県としてはどうしても立山と黒四ダムとを結ぶルートが必要であるという考えが生れて来ました。

この構想実現のため政治的折衝の結果、TKAという第三セクターが設立され、立山直下をトンネルで抜き、室堂と黒四ダムを結ぶ自動車道を計画したのである。このような大掛りな自然破壊を何とかして防ぎたいという有識者が故牧野平五郎さん(会員番号二〇六)を中心に糾合して昭和三十七年四月に富山県自然保護協会を設立し、猛運動を展開しました。最初は天狗平から立山カルデラ、鬼岳、東一ノ越にルート変更を主張しましたが、調査費の不足から実現できず、最後は室堂平をトンネルにし、室堂ターミナルを大谷に半地下式とすること、黒部側は道路を止めて、ロープウェイ、地下ケーブルということ、昭和四十六年春山から現在の姿で共用することになりました。この間足掛け十年の交渉を重ねて室堂平から黒四ダムまでがどうにか保全されたことになりました。なお開通時には道路未舗装のため、現在は利用規制の理由で全線、全期間マイカーの通行禁止を実現しています。なお認可条件の一項により昭和四十一年十二月よりルート緑化研究委員会を設立して、現地産植物による破壊地の緑化修景を続けていること、果制度によるナチュラリストを昭和四十九年夏より設置し、現在一五七名のシーズン・ナチュラリストが来訪者に自然保護思想の普及のため活躍しています。これらのことも私達山を愛する者の地道な熱意の結果だと思っています。(富山支部自然保護委員)



図書 紹介

マナスルの嵐

メスナー著
岡沢祐吉訳

現代のスーパー・クライマーといわれるラインホルト・メスナーによる一九七一年春のマナスル南壁登攀記である。ヒマラヤの巨峰における壁の登攀の一つの課題がここでまた解決された。一九七〇年米英隊によるアンナプルナ南

壁、ドイツ隊によるナンガ・パールのルパール壁、一九七一年フランス隊のマカル・西壁と続くヒマラヤにおける新しい時代への幕あけとなった登攀であることは、いまさら説明するまでもないが、その苛酷な登攀の全貌が、訳者の努力によって翻訳されたことはまことに喜ばしい。

ホルスト・フランクハウザー以下八名というスモール・エクスペジションでマナスルの南壁に挑んだということも、新しいヒマラヤ登山の動向を示すものだが、このような技術的に困難なルートではシェルパは全く使えず、ほとんど隊員だけによる登攀の展開もスリ

地方居住会員へのお願い

地方に居住される会員は、現在全会員の約半ばに近い数に達しております。地方会員の居住地に本会支部のない地域(例えば鹿児島県の如き)の場合はやむを得ませんが、支部が存在する地域に居住される会員は、大部分の方が当該支部に所属されておられるのは申すまでもありません。しかしながら、なかには本人の希望等で支部に所属しておられない方もあるようです。この際ぜひとも当該支部に所属されるよう、切にお願いする次第です。本会の会員数も漸

時多くなり、各支部での会員掌握は支部活動の第一歩であり、重要な要素となっております。この点は従来からも各支部長から常に要望されたことであり、理事会としても支部発展、ひいては本会発展のため等閑視できませんので、ここに改めて強くお願いするわけであります。なお、例えば福島県居住の会員でも、その住所が新潟県に近いような場合、福島支部でなく越後支部に所属するというようなことは従来もありましたが、両支部長合意の上で一向に差支えなく、ご本人の希望に添うように取計うこと致します。

リングである。

本書の圧巻は何といってもメスナーとイエガーによる登頂の場面であろう。途中イエガーは断念して引き返し、メスナーが単独登頂に成功し下山にかかったところから嵐に遭遇、九死に一生を得て第四キャンプに戻るとイエガーの姿がなく、下から登ってきた二人が捜索に出かけ、その一人がまた行方不明という悲惨なアクシデントが発生した。このシーンが無電での応答をもとになまなましく書かれており読むものの胸を打たずにはおかない。

付録として、隊員リスト、ルート説明、医師の報告、装備の改良、

昭和五十三年五月 理事会

各支部の地域

- 北海道支部 北海道全域 / 岩手支部 岩手県 / 秋田支部 秋田県 / 山形支部 山形県 / 宮城支部 宮城県 / 福島支部 福島県
- 越後支部 新潟県 / 信濃支部 長野県 / 山梨支部 山梨県 / 静岡支部 静岡県 / 東海支部 愛知県 / 三重県 / 岐阜支部 岐阜県 / 富山支部 富山県 / 石川支部 石川県 / 関西支部 近畿、四国、中国の一部 / 山陰支部 鳥取県、島根県 / 福岡支部 福岡県 / 東九州支部 大分県、宮崎県 / 熊本支部 熊本県

文献、行動記録、資材リストが簡潔にまとめられて参考になる。ヒマラヤ登山の文献として見落せない貴重な記録である。原題名は、
Sturm am Manaslu

昭和五十三年二月十五日、二見書房発行、二二二ページ、写真多数。定価九五〇円。
(山崎安治)

登山ハンドブック

千葉 重美著

イラストを多数挿入した初歩の登山技術書である。登山の準備、登山の充実、登山の道具、登山の技術、登山の実践の五篇にわけ、山登りの基礎をいねいに説明しており、これから山登りを始めようという人や、始めたばかりの人にとって役に立つ。帰宅後の記録の整理、山でのモラル、山の楽しみ方など細かな点まで配慮されている。

ルーム基金応募者

ご芳名(12)

(昭和53年6月12日現在)

敬称略・順不同)

- 〔東京の部〕二口一万円 数字は口数
- (1) 芳野菊子、宇津力雄
- 小計 二口 金二〇、〇〇〇円
- 累計 一一五三・九口
- 金一一、五三九、〇〇〇円
- 〔地方の部〕二口五千円 数字は口数

今年の立山はここ数年にない積雪です

- サマースキー (7月末まで)
- 第6回立山スケッチ教室 (7月30日~8月7日) 講師 松岡寛一画伯 (神戸在住)
- 会員の方は特別サービスさせていただきますのでその旨お申し出下さい。

雷鳥沢温泉 ロッジ立山連峰

支配人 坂本 幹 (元愛知県岳連理事長)
電話 0764-41-2345

昭和五十三年四月一日、ナツメ社発行、二三八ページ、定価八七〇円。(山崎安治)

(2) 重広恒夫 (1) 藤井茂雄、安江安宣、村岡昭三

- 小計 五口 金二五、〇〇〇円
- 累計 一一六六・三口
- 金五、八三一、五〇〇円
- 大累計 金一七、三七〇、五〇〇円
- 申込人員 東京 六〇一名
- 地方 五二一名
- 計 一一二二名
- 法人からの寄付 (6月12日現在入金済分)
- 金一一、五七〇、〇〇〇円

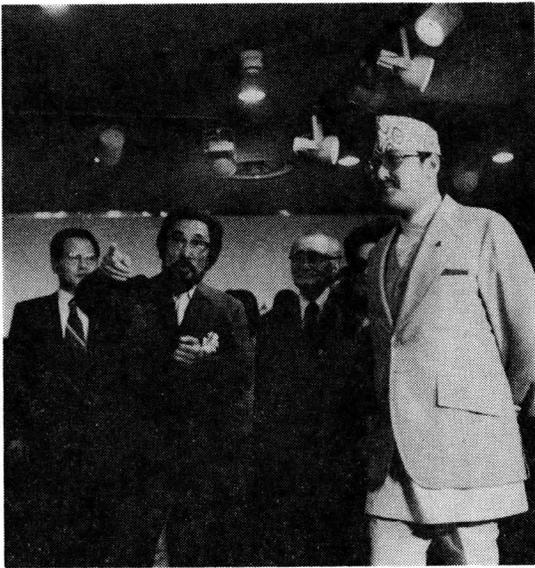


東西南北

ネパール国王を迎えて

折井 健一

その1



国王と王妃にご説明する西堀会長(中)と清野画伯(左)／写真・折井健一

ネパール国のビレンドラ国王とアイシュワリヤ王妃は王妹シヨバ、シヤヒ妃殿下御夫妻と共に五月十五日午後、羽田空港着の特別機で国賓として日本を訪問された。二十一日に福岡空港から御帰国になられるまで一週間の御滞在中は、迎賓館における歓迎行事から始まって、皇居御訪問、十六日から東京大学御訪問、国立博物館御見学、日本電気横浜工場御視察等々諸行事に臨まれる御多忙な

毎日であった。親日家であらせられる国王御自身は皇太子時代に約四カ月間、東京大学に留学して、日本の近代史、憲法などを学ばれており、現在同国の近代化計画に取り組まれている。今回の再訪日の目的は、日本の皇室との友好促進であったが、経済、技術の協力に対し期待もされているやに伺った。本会においては、急であったが

国王のご来日を記念して、日本橋三越本店において「ヒマラヤを描く美術展」を清野会員の努力に依り、五月十六日から二十一日まで、本会主催として開催することが出来た。

ヒマラヤ風景を描いては、それに権威者である足立真一郎、上野春香、江村真一、熊谷 樞、清野 恒、福王寺法林、藤江幾太郎、前林章司、三水公平、坂本直行以上十名の諸先生から快よく三十八点の出品を得て、誠に荘麗な展覧会が開催された。

十七日の午後には御多忙な日程の間を国王御夫妻も展覧会場に御成りになり、西堀会長の御案内で熱心に御鑑賞いただいた。

国王は絵画がお好きであり、御自身でも油絵をお描きになると承わっていたが、御出迎え申し上げた、清野、三水、前林各画伯の御説明にもよく耳を傾けられ、専門的な御質問もなされた様子であり、また会場に居た会員のひとりひとりに握手をなさるなど、威あって猛からずといったまことに御人柄がしのばれる御姿に接した。

国王御夫妻の訪日を機会に日本側には、「日本ネパール友好国会議員連盟」が発足したとことである。日本から初めてネパールを訪れたのは一八九九年に河口慧海師が仏典を求めてこの国に入り、ネパール人の日本訪問は一九〇一

年に五人のネパール学生の留学から、両国の親交が始まっている。ネパール・日本両国の協力強化は今後も益々官民相互の理解に依りネパールの自然の美しさ、人の心の豊かさを通じてなお一層深まることを期待したい。単なるブームに終わらせてはならないと思う。今回、西堀会長にはネパール国ゴルカ・ダクシン・パフ二等勲章(平和鳩章)が授与されたことを併せて報告とする。

東西南北

その2

会津駒ガ岳山菜山行

によせて

高 沢 英 夫

単に登山だけでなく、山菜が食べられて、採集できて、彼の秘境に足を踏み入れられるときは、降って湧いた話だ。

幾度か行きそびれて残念断ちがたい、言わば憧れの山であり、うらみの山でもある。早速参加させていたただく。

五月二十六日午後十時、バスは、新宿を後に一路松枝岐を目標した。参加会員は、六十八名だが、物凄い人気だ。毎度のことながら、心配の種のお天気は、まず上々の様子だ。

明けて二十七日四時半、中天にはまだ月明が残る。松枝岐村で最初の歓迎は、岩燕大軍の乱舞であ

った。出発まで貴重な仮眠をむさぼる。山菜採り専門パーティーを残して、五班のグループが八時半宿を出る。登山口は滝沢橋を渡って、左へ林道をつめる。三十分程で登山道に入る。椽や水楯が一際逞しい。白い大きな花を今を盛りと、みせびらかせているのは辛夷。ムラサキヤシオツツジのまだ濃い紅紫色に固くとざされた蕾の可憐なのは、何にくらべようか。暫く急登にあえぎ、静かな歩を進める。特別、聖物ばかりの顔ぶれでもなさそう。次第に緊張がほぐれて、ヘラズ口をたたくものがででくる。体力のある方々、やや並の人達、いよいよ隊列がくずれ、間隔が長くなる。それに加えて、各班が混然入り乱れて、仲の良い談笑の輪に変化していく。さすがは春の山だ。楽しさが一杯にひろがる。会員の一人一人によるこびがあふれている。残雪を踏む快適な音色が、駒鳥、大瑠璃や、ゼニトリの伴奏に調和する。柵の巨木の垣間越しに駒ガ岳の全容がみえだす。いよいよ、大自然のこの奥深い駒へ来たのか、そんな実感が胸に迫る。

数年前、恋の岐沢を通行して、平ガ岳からの帰路、遠望したその山塊こそ、この駒ガ岳なのだ。いつの日か来よう。それから幾度か機会を逸して今日に到った。人にはそれぞれ好みの山、技量にふさわしい山、おちこち、時間の制約

山研で日本山岳会全国自然保護懇談会を開催します。自然保護に関心をお持ちの方、お気軽にどなたでもご参加下さい。なお前日(8日・金)は岩魚止小屋泊で、徳本峠越え上高地に入る予定。

参加希望の方は、山岳会事務局宛に一報ください。案内状をお送りします。(準備の都合上、8月中旬で締切ります)。問合せは下記まで。電話03-1586-1221(一内線六六三七) 池田智津子(昼のみ)

(自然保護委員会)

第三七三回小集会

山の歌教室

山と山の歌の想い出を語る会

日時 9月19日(火) 18時30分

20時30分

会場 五〇〇円

場所 日本山岳会ルーム

数多くの山の歌があります。私たちは山の歌を、山頂で、草原を歩きながら、ビバークの夜、焚火を囲みながら、うたいました。当日は、山の歌の話を神崎忠男氏に、かかれた山の名曲を渡辺陽子氏の指導によってうたうほか、山の歌をきく予定(生の歌声です)。ほんの少しアルコールを入れ、山の歌、山の話に耳を傾け、山を語る会にしたいと思えます。ふっつてご参加下さい。

(集会委員会)

昭和五十三年除籍者

- △東京▽
- 二二二九 松下昭三/三七四六
- 慶応大学工学部山岳部/四〇八
- 五 日本大学医学部山岳部/四二一七
- 鈴木三郎/四四一三
- 山本俊冬/四七九〇
- 佐藤安男/四八九二
- 田所博之/四九〇九
- 石島義二/五一四七
- 電機通信大学山岳部/五四四三
- 小味秀純/五五〇二
- 黛卓郎/五六九三
- 玉井康雄/六二六〇
- 玉木五郎/六三九七
- 福田良/六四二六
- 長島宏/六五七三
- 岩野暢夫/七〇〇一
- 高橋和哉/七〇四一
- 中村雅人/七〇四二
- 渡辺恭夫/七一二三
- 吉田広明/七一七七
- 富沢昌一/七一八八
- 無宗榮生会/七一九二
- 三好剛夫/七三四四
- 大榎豊太郎/七五二六
- 渥美英樹/七五七三
- 松岡真雄/七六八〇
- 荻

- 野修/七六八四
- 大坂透/七六八五
- 島村隆/七七七〇
- 日下部憲/七七八三
- 清水清二/七九三四
- 水戸守巖/七九四五
- 宮本衆司/七九四六
- 水川直/七九五二
- 小林孝幸/七九七九
- 渡井恵吾/七九九〇
- 森田勝/八〇〇六
- 小林俊人/八〇一三
- 飯塚洋二/八〇二一
- 林田正彦/八〇五二
- 岩本浩明
- △岩手▽
- 七三六六 石川武男
- △山形▽
- 七四八六 菅原定
- △福島▽
- 二七三〇 斎藤善作/六一七六
- 斎藤満/七三四八
- 鈴木洋吉
- △信濃▽
- 四五一七 大和達郎
- △東海▽
- 五三三四 落合永子/七二七三
- 永井勝美/七二七四
- 鶴田倍弘
- △岐阜▽
- 七二三〇 小林直人/七五〇八

- 石垣登/七五三〇
- 岩佐善弘
- △石川▽
- 七四四七 長田和己
- △関西▽
- 四七九九 浜田啓司/五〇四二
- 中村光伸/五五九二
- 小野督太郎/六三一六
- 深井英司/七五六七
- 松尾好泰
- △福岡▽
- 四一五八 原口陽吉/六七四八
- 重藤秀世
- △熊本▽
- 六四三二 松本望
- * * *
- 四九九二 高橋義勝/六五一六
- 富安忠/七一〇三
- 多田勇三/七一四七
- 佐藤忠兵衛/七二八五
- 山田博/七六〇二
- 平尾清
- △住所不明▽
- 五九三四 都筑竜/六四九七
- 賛田統亜/六七九七
- 和田豊司/七二四〇
- 角張嘉孝/七九七八
- 吉田隆三/六五九八
- 島富泰司/七五二七
- 古賀昌子

JACノミの市

出品をお待ちします

第2回JACノミの市が近づいてきました。みなさまの積極的ご出品をお待ちしています。

△出品対象▽山に関係するものならなんでも。ガラクタから珍品・貴重品まで(販売価格の70%を提

供者に還元)

△出品方法▽原則としてルーム持参(不可能な場合はルーム宛連絡して下さい。担当委員が頂戴にあげります)なるべく希望価格をお示しください。

△出品締切▽10月10日(火)整理の都合上、早めにお願ひします。△ノミの市開催日▽10月28日(土)14時~17時日本山岳会ルームで

ビール・パーティー

(集会委員会)

恒例のビールパーティーを開きます。

日時 8月19日(土) 午後4時から7時まで

場所 日本山岳会ルーム 会場 一〇〇〇円

主催 婦人懇談会
みなさまお誘い合せのうえ、ご出席ください。

会務報告

5月理事会

5月23日午後6時30分

本会ルーム

- ▽出席者 西堀会長、望月、折井各副会長、宮下、中川、大森久、皆川、鈴木、倉知、黒石、牧野内、嵯峨野各理事、片岡監事、浜野評議員
- 委任 高遠、山本各理事、山崎、金坂各評議員

▽議案

- ・支部長交代について (折井)
- ・岩手支部 佐藤敏彦(六九三五)
- ・福島支部 中島正夫(二七二五)
- ・石川支部 増江俊三(六三三五)
- ・学生部アラスカ遠征、ブラックバーン峰登山 (牧野内) 承認

▽報告事項

- ・支部長会議報告 (折井)
- ・地方在住者は、支部のない地方は別として、出来る限り最寄りの支部に入るようすすめる
- ・ネパール国王に絵画寄贈、来日の記念として (宮下)
- ・青年懇談会ラトック登山隊5月29日に出発、8月中旬に帰国予定 (宮下)
- ・集会 (中川)

5月26日～28日山菜山行
 6月下旬 会津の山を語る会
 ・山岳 (倉知)
 海外遠征記録だけでなく、国内の記録も掲載する
 ・婦人 (黒石)
 インドとの交流、来春実施予定
 ・山日記 (皆川)
 年次晩餐会に間に合うように準備
 ・年次晩餐会は12月2日に決定、会場検討中 (宮下)

ルーム日誌 (53年4月)

- 3日(月) 集会委員会
 - 4日(火) 指導委員会
 - 5日(水) 婦人懇談会 研究会
 - 6日(木) 指導委員会 図書委員会
 - 7日(金) 明治大学炉辺会
 - 12日(水) 山岳図書語る夕べ
 - 13日(木) 婦人懇談会
 - 17日(月) 青年懇談会
 - 19日(水) 三水会
 - 20日(木) 婦人懇談会 研究会
 - 21日(金) 山岳図書館オープン記念パーティー
 - 22日(土) 早稲田大学岳友会
 - 24日(月) 評議員会 理事会
- 今月の来室者 五六四名

会員移動

- 退会者
 五二五一 定行吉信 (53年4月)
 七八四一 元田貞男 (53年4月)

終身会員

- 二一三六 山口京一 (53年4月)
- 二五五三 山本 元 (53年4月)

支部変更

- 二八六三 久木春男 (53年4月) (福島↓その他)

支部変更

- 五九九六 清水美代子 (その他↓北海道)

夫婦会員

- 五九九六 清水美代子
- 八三八四 清水孝悦

一九七八年日米民間環境会議

アメリカ最大の山岳・自然保護団体シエラ・クラブ・地球友の会、オデュボン協会の呼びかけに応じて第一回日米民間環境会議が開かれます。多数会員の傍聴・参加をお待ちします(会員章持参)

会場 横浜市中区山下町産業貿易センタービル横浜国際会議場
 日時 7月24日～28日 毎日午前9時30分より午後6時まで

内容 環境教育、環境汚染、環境法、自然保護その他。

昭和五十三年七月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四 サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 大森 久雄

電話東京(261) 四四三三

振替口座東京三一四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂

